

掌編小説 「市中遭難」(「虚勢」書き直し版)



夕刻の、お上からの緊急事態宣言発出を前にした昼下がり。

感染拡大を懸念して店内食は中止。テイクアウトと宅配のみに絞った売上の様子を見ようと、自宅本社からお店へ自転車を飛ばしました。

いつも通る森林墓地公園を抜けようとすると、夜のニュースの重さを想像させるように、不気味なうなりを上げて、強風が吹着付けていました。

晴れて、思いのほか暖かいにも拘わらず、人影はなく、動く物と言ったらカサカサと気ぜわしげな足音をたてて逃げ惑うように小走りする枯れ落ち葉の小さな群ればかり。

将にゴーストタウン。

「墓地だからゴーストはあったりまえ、やん」と自転車を漕ぎながら一人胸の中でジョークを飛ばしてはみたものの、却ってそれは一層虚しさを誘い、「言わなきゃ良かった」と思いました。

この先どうなるのか？

それは誰にも分かりません。

不安を言っても、愚痴を言っても、その量の多さと引き換えに誰かがそれ同等のレベルに効力のある「お救い券」をくれるわけでもありません。

全世界どこへ行っても似たような状況なので逃げ場もありません。

ないないづくしで何にもありませんが、元々何にもないので、それほど落差は感じません。幸か不幸か、しんどいばかりで、一つもいい目を見たことがないのが、却って幸いしております。

「何が幸いするか？終わってみるまで分らない」

その高等疑問こそが「難問好きにとってはたまらんわ」

と、強がることくらいしか思いつかない昼下がり。

虚勢を虚勢と気づかずにいられるのは未だしあわせ。

虚勢だと分っているのに無理に使うのは、さすがに心が折れる。

それしか手がないのは、さすがに。

自分は、一瞬、何をしに、どこに向かって走っているのか、今、自分がしようとしていることの目的がわからなくなり、ゴースト墓地の中で、自転車を止めました。

耳元で、風のうなりが急速に高まるのを感じました。

それは、今来た道と、これから向かう先への道、自分の前後をきれいにかき消してしまい、線上市たはずの自分が、只の一点上になり、何か全てを失ったような錯覚に襲われ、進むに
進めず、引くに引けなくなってしまう。現在位置喪失で、

「市中遭難」

そんな言葉が脳裏をよぎりました。

(完)